
風向きを変えるとき

hiro2001

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

風向きを変えるとき

【Nコード】

N3650C

【作者名】

hiro2001

【あらすじ】

風向きはただ黙っていても変わらない。自分の手で変えるものなんだ……かつて彼女に言ったその言葉が、時空を超えた今、僕の胸に深く突き刺さる。ひと足先に風向きを変えようとする瑞紀を追いかけて、二人で書いた風向きを変える物語が、今ゆっくりと動き出します。

プロローグ

家の郵便受けを覗くと、一通の青い封筒が目に見え込んできた。

その潔いまでの青さは常夏の海を想像させたが、頭上から激しく照りつける太陽以外に、僕自身が夏を体感することはなかった。滴り落ちる汗にうんざりしながら、それでも封筒の裏面を見ると、そこには見覚えのある名前が神経質そうな字体で書かれていた。僕はその場ですぐに読みたい衝動を懸命に抑えると、家の扉を開けて一直線に自分の部屋へと向かった。そう、僕は心の奥底で、いや体全体で待ち続けていたのだ。彼女からの連絡を、そのかけがえのない存在を目の当たりにする日を。

部屋に入ると僕は、手紙と正面から向き合うために背筋を伸ばして机に座り、はさみを使って丁寧に封を開けた。そして青い紙の上に並んだ文字の群れを、貪るように目で追い始めた。

河西くんへ

あれからもう三年が過ぎたんですね。時間の流れなんて、過ぎ去ってみれば本当にあつという間だと思えます。あの時はあんな風に別れちゃったけど、少なくとも私は、あなたに出会えたことを感謝しています。私が悩んでいた時にあなたが言ってくれた言葉が、今でも胸の中に鳴り響いています。

風向きはただ黙っていても変わらない。自分の手で変えるものなんだ

この言葉は、今でも私の大切な宝物です。そして私は変わることを決意しました。

唐突だけど私、来月には結婚します。河西くんとは久しぶりに会って話がしたいけど、多分もう少し先のほうがいいのかもしれないね。

ではまた、いつか時の輪が接することがあれば会いましょう。そ

の時が来るまで、お互いに風向きを変えていけるように頑張りましよう。

手紙はそうして終わっていた。僕はもう一度丁寧にそれを読み返すと、両手を頭の後ろに回しながら、あの頃の自分たちに想いを馳せた。僕は高校一年生で、それぞれの悩みを抱えながらも精一杯に生きていた。絶望的な運命の波に翻弄されても、お互いに励まし合いながら切り抜けてきた。でも今の僕は、彼女と離れてから何をすることもやる気がなくなり、この春に大学受験を失敗して浪人生活に入っても勉強をする気すらなく、毎日をただ漫然と過ごし続けていた。予備校にだけは辛うじて通っていたが、家に帰るとすぐに自分の部屋に閉じこもって、親に買ってもらったばかりのパソコンと向き合うだけの日々を過ごしていた。そこには夢や希望といったものや、まして努力などといった積極的なものは何もなかった。自ら風向きを変えようと風向きが変わることを期待してもいかなかったのだ。でも僕は、あの時確かに言ったのだ。彼女に対して、風向きは自分の手で変えるものだ。と。そう言えるだけの自分が、あの蒼い時には確かに存在していたのだ。

僕はその朝、一人の女の子を左斜め前に見ながら駅のホームの片隅に立っていた。周囲は会社や学校へと急ぐ人々で溢れかえっていたが、僕がその子を見失うことは決してなかった。制服から同じ高校であることは疑いようがなかったが、同じクラスではないこともあって、僕には彼女が同じ学年なのかどうかさえわからなかった。僕が彼女を初めて見かけたのは、高校に入ったばかりの四月上旬だった。彼女は、茶色がかった長い髪をポニーテールにまとめ上げ、しばらくするとその手にラクロスのラケットを持つようになった。彼女を正面から見ることはほとんどなかったが、それでも僕は半月をかけて次第に、そして決定的に好きになっていった。でも同時に、僕にははつきりとわかっていった。彼女と僕とでは住む世界が全く違うことを、決して越えることのできない高い壁が存在していることを。

「おいつ、何ぼおつとしてんだよ？」

その突然の声に横を向くと、目の前には浅黒い顔に白い歯を見せてながらいたずらっぽく笑う雅也が立っていた。

「何だ雅也か。脅かすなよ」

「孝平こそ、早くしないと学校に遅れるぞ」

そう言いながら、でも次の瞬間、雅也の姿は来たばかりの電車の中に消えていた。僕はそんないつもと同じ光景にある種の微笑まじさを感じながら、その後を追って電車に飛び乗った。雅也とは小学生の時から親友で、もう十年近くになる付き合いだった。中学の時からサッカーを始め、高校生になった今では、一年生ながら早くもレギュラー候補になるほどの腕前になっていた。背が高くがっしりとした体格と浅黒く日焼けした顔が、何よりそのことを証明していた。一方の僕はと言えば取り立てて部活動をするわけでもなく、暇さえあれば学校の図書室でひたすらに文章を書き続けていた。幼

い頃から作家になることが夢だったが、おそろくなれないであろうことも十分にわかっていた。今まで公募雑誌や文芸誌に何度か投稿してみたが、どれひとつとして採用されることがなかったからだ。「おい孝平、あの向こうに立ってる女の子のことどう思う？ 杉下理絵って言って、隣のクラスの子なんだけど、俺ああいうのタイプなんだよな」

電車の中で放たれた雅也の声に促されるように目をやると、そこにはラクロスのラケットを抱えて佇む女の子の姿があった。そう、僕は一瞬にしてその名前から学年までを知ることになったのだ。

「ああ、確かにいいかもな」

「何だよ、その素っ気ない言い方は。やっぱりお前は、物静かな文学少女のほうがいいのか？」

雅也の問いかけに言い返そうとした僕は、でも電車の急ブレーキによるけてしまい、うまく言葉を発することができなかった。雅也に自分の気持ちを悟られなくなかったこともあって、あえて気のない振りを装ったが、それとは裏腹に僕の心は、理絵に対する切ない想いで覆い尽くされていた。スポーツ選手か文学少女かどうかなど関係なかった。自分が降りるべき駅が目の前に迫っていることにも気づかずに、僕は数メートル先にある理絵の姿に目を奪われて続いていた。

学校は、僕らの住む町から電車で三つめの駅近くにある、東京郊外の平凡な公立高校だった。取り立てて特徴的なものもなく、その意味ではまさしく、僕を映す鏡のような学校で居心地は悪くなかった。僕と雅也は同じクラスで、十年近くにわたる腐れ縁はここでもその威力を存分に発揮していた。教室は校舎の四階の片隅にあり、窓際で一番後ろの席だった僕は、いつも窓の外の景色をあてもなく眺めていた。どこまでも殺風景なビルや住宅が続くばかりで、海が見えるような爽快な環境にはなかったが、少なくとも退屈な授業を聞いているよりは遥かに有意義だった。僕はどちらかというと友達を作るのが苦手なほうだったが、明るく社交的な雅也と友達でいる

ことで、結果的に僕にもそれなりの仲間ができた。でも僕は、彼らと積極的に関わるのを避けるように、休み時間になると一人で図書室に向かい、その勢いのままに文章を書き続けた。それが、僕にとっての唯一の存在理由だと頑なに信じていたからだ。

やがて退屈な授業も終わり、部活に向かう雅也と別れの挨拶を交わすと、僕は脇目も振らずに駅まで歩き、気だるい昼下がりを象徴するように閑散とした電車に乗って一直線に家に帰った。今月末が締め切りの、ある雑誌の短編小説のコンテストに応募する物語を何とか今日中に仕上げてしまいたかったからだ。それは、ある高校生の男女を中心に織り成される切ないラブストーリーで、僕は現実的に叶うことのない、自分と理絵との関係をイメージしながら、夢を見るような気持ちでその物語を書いていた。仮にそれが、寂しい自慰行為だったとしても構わなかった。少なくともそうすることで、辛うじて僕の心のバランスが保たれていたのだから。

それは、街路樹の蒼さが目に染みる五月半ばだった。その日、僕がいつものように学校から家に帰っていると、郵便受けに一通の封筒が差し込まれていた。それは雑誌社からのもので、早速部屋に入って封を開けると、そこには短編小説のコンテストの佳作に選ばれた旨の表記がなされていた。佳作というところがいかにも自分らしいと思っただが、ともあれ入賞したことは明らかで、僕は一人で小躍りしながら無邪気に喜んだ。それは、自分の作った物語が生まれて初めて認められた瞬間だった。僕はその夜、努力が報われた感動を通り越して涙が止まらなくなり、うまく眠りにつくことができなかった。

翌朝、僕が相も変わらず、前に理絵を見ながらホームの片隅に立っているのと、いつもより少し早めに顔を出した誠也がこちらの顔を覗き込みながら尋ねてきた。

「おい孝平、今日はやけに嬉しそうな顔してるな。何かいいことでもあったのか？」

「わかるか？ 実はさ、俺の書いた小説が雑誌のコンテストで入賞したんだ」

「えっ、本当かよ？」

「ああ、自分でも信じられないんだけどな。来月に発売されるその雑誌に載るんだ」

「そうか、よかったな。お前もやっと世間から認められたんだな」

「おい、やっとは余計だろ？」

「でも、本当によかったな。雑誌が発売されたら真っ先に買うからな。あつ、クラスのみんなにも言わないとな」

雅也はそう言いながら僕の肩を叩くと、いつものようにその真っ白な歯を見せた。僕は世間から認められたことよりも、他ならぬ雅也に認められたことが何よりも嬉しくて、いつになく高いテンション

ンのやり場に困るほどだった。勉強でもスポーツでも叶わなかった雅也に、不戦勝のようなものとはいえ、一つの分野で僕は明らかに優位に立ったのだ。でも僕は、そこに隠された落とし穴があることにまだ気づいてはいなかった。そう、それは本当に一瞬の、ささやかな栄光に過ぎなかったのだ。

「実はさ、ちょっと恥ずかしいんだけど」

「何だよ、早く言えよ」

僕と雅也はその時、学校近くのファーストフード店に身を置いていた。五月下旬にしては暑い日の夕方、部活のなかつた雅也が、大事な話があるからと僕を誘ったのだ。二階の窓際の席からは、周囲の建物の群れや、その下でせわしなく動き回る人々が手に取るように見渡せた。

「俺、理絵と付き合うことにしたんだ」

「えっ、理絵って誰だよ」

「隣のクラスの子だよ。ラクロス部に入ってるんだけど。ほら、前に電車の中で話したでしょ？」

雅也から告げられるまでもなく、その名前は、僕の頭の中にしっかりと刻み込まれていた。僕はあまりに唐突で意外な雅也からの告白に、ただ反射的に聞き返してしまっただけなのだ。

「何だよ？」

「いや、いきなり変なことを言い出すから驚いただけだよ」

「おい、変なこととは何だよ。親友のお前だからこそ、こうして正直に話してるんだからな」

「悪かった。でも、どうして付き合うことになったんだ？」

「同じクラスにラクロス部の子がいてさ。ほら、圭子だよ」

「そんな子いたかな？」

「全くお前って奴は。まあそれはともかく、その圭子に、同じ部の同級生が俺と話したがって言って言われて行ってみたんだ。そしてそれが理絵でさ、俺のこと好きだって言われて」

「そうか」

僕にはそれ以上の言葉を発する気力がなかった。雅也が女の子から人気があることは今に始まったことではなかったが、それが理絵だった事実を知るに及んで、僕は羨ましさを越えたほのかな嫉妬の念に苛まれた。僕が逆立ちしても叶うことのない夢が、雅也の場合はいとも簡単に現実のものとなってしまふのだ。小説でもこうはうまくいかないのに……何もかもを投げ出して今すぐに帰りたい衝動を懸命に抑えながら、僕は目の前の雅也に向かって作り笑顔を振り撒くだけで精一杯だった。

それから、僕にとっては地獄とも言うべき日々が始まった。毎朝ホームの片隅から、左斜め前に佇む理絵を見つめることは相変わらずだったが、その隣には必ずと言っていいほど白い歯を見せて微笑む雅也の姿があった。そして、さらに僕の嫉妬の念を掻き立てたのは、二人が見事なまでに似合っているという誰が見ても動かしがたい現実だった。仮に雅也の代わりに僕がいたとしたら、その滑稽なまでのアンバランスさに自分自身が恥ずかしくなるだろうと思った。それはまさに、ドラマや映画のワンシーンにあるような光景だった。だから僕は、理絵のことを潔く諦めようと試みたが、表面的には可能であっても、心の奥底でさらに大きくなっていく想いを消し去ることはできなかつた。僕は、自分の中にうごめく欲望を現実で必死に押さえ込もうとしていたのだ。それが、始めから無理であることを承知しながら。

それは、梅雨に入ったばかりの六月半ばだった。天空からしとしとと雨が降る中、学校が終わった僕は一直線に家に帰ると、近くのコンビニで買った雑誌を取り出して机の上に置いた。その中に自分の書いた短編小説があることは確かだったが、僕はどうしてもそれを見る勇気がなかった。活字になった瞬間に物語が一人歩きして、自分の手の届かない場所に行ってしまうのではないかという漠然とした不安に駆られたからだ。でも、永久にこの状態のままにいるわけにもいかないと悟った僕は、勇気を振り絞ってページを開いた。そして恐る恐る読み始めた瞬間、目の前が真っ暗になるほどの衝撃が頭を打った。文章自体に問題はなかった。文体も決して悪くなかった。高校生の主人公「僕」が、密かに想いを寄せる女の子に自分の気持ちを打ち明けるまでの過程を描いた切ない物語で、今の自分を重ね合わせた内容に少し古臭いイメージはあるものの、全体的に見てよくまとまっていた。でも、そこに登場してくる人物が問題だった。そう、僕は自分の高ぶる想いのままに、杉下理絵の名を实名で出してしまっていたのだ。僕は、あまりに初歩的な過ちが恥ずかしくなるとつさに雑誌を閉じ、この事態を一体どうしたらいいものかと、懸命に頭を働かせて考えた。理絵はともかく雅也がこれを読むことは確実に、それが彼女にも伝わることは誰が考えても明らかだった。仮に雅也が読まなかったとしても、大々的にクラスで言ってしまったことで他の誰かが読む確率は高く、いずれにしても理絵の耳に入る可能性は大きいのだ。僕は、今さらながらに自分のしてしまった過ちの大きさに愕然とし、結局その夜は一睡もできなかった。でも、当然のことながら時間の流れを巻き戻すことはできなかった。仮に泣き叫んで助けを求めたとしても、神様はきつと僕に救いの手を差し伸べてはくれないだろう。誰がどう見ても、全ては自業自得だったからだ。

次の朝、足取りも重くホームへの階段を上ると、僕の定位置の片隅に理絵と雅也の姿があった。嫌な予感がしながらも二人のもとに近づいていくと、雅也よりも先に理絵がこちらに雑誌を突き出しながら静かな、でも強い口調で言った。

「河西くん、これどういうこと？」

「どうって言われても」

「雅也から、河西くんの書いた小説が雑誌に載るって聞いたから、早速今朝その売店で買ってみたんだけど、どうしてここに私の名前があるの？ 説明してよ」

「理絵、まあいいじゃないか。孝平だって悪気があって書いたわけじゃないんだから」

「それはそうだけど、でも許せないわ。せめて名前を変えるくらいの気配りがあってもいいんじゃない？ これじゃ、河西くんと私を主人公にした恋愛小説じゃない。学校のみんながこれを読んだらどう思うかぐらいのこと、あなただってわかるでしょ？ 本当にどうしてくれるのよ？」

必死になだめる雅也の言葉を聞くこともせず、理絵は僕に対しての怒りや不満を正面からぶつけると、こちらの反応を見ることがもせずに、ちょうど到着した電車に乗りこんでいった。雅也は僕に向かって何か言いたそうな素振りを見せたが、結局はその後を追うように走り去っていった。そうして一人取り残された僕は、理絵から突きつけられた雑誌を胸に、ただ自分のしてしまった不躰で愚かな行為を悔いるしかなかった。でも、全ては既に終わってしまった。僕の真剣な想いは思わぬ形となって理絵の、そして雅也の心に不用意に届けられてしまったのだ。

でも、予期していたことではあったが、事態はそれだけでは終わらなかった。学校に着くと僕のささやかな物語の内容は、クラスどころか学年中に広がっていた。それは、単に自分の書いた小説が公表されたことだけではなく、自分の想いが誰に向けられているのかを周囲に伝える結果になってしまったのだ。僕は、奈落の底に突き

落とされたような絶望感に加えて、恥ずかしさと周囲からの嘲笑を含んだ好奇の視線に耐えられなくなり、始業のチャイムも守らずに席を立って教室を飛び出すと、階段を駆け上って屋上に向かった。誰かが後ろから来るような気配がしたが、僕はただその状況から逃げたい一心で気にも留めなかった。

「お前、案外足が速いんだな」

その声に振り返ると、そこには前かがみになって息を切らせながら佇む雅也の姿があった。午前八時半の屋上には、当然のことながら僕らの他に誰もいなかった。

「全く可笑しいよな。せつかく雑誌に自分の小説が載って、これだよと俺も認められたと思ったら、次の瞬間には単なる笑い者だもんな」

「そんなこと言うなよ。少なくとも俺は、お前の小説が世に出て嬉しいし、まだじっくり読んでないけど、きつといい話だと思うぜ。たまたまちよつと登場人物を間違えただけじゃないか」

「間違えてなんかいないさ。全部本当のことだよ。俺は前から理絵のことが好きだったんだ」

僕の悲痛な叫びに、雅也はただ黙ってこちらを見つめるだけだった。空は相変わらずどんよりとした雲に覆われていて、今にも雨が降り出さそそうな陰鬱な光景と、僕らの置かれた状況は見事にマッチしていた。

「雅也にはわからないだろうな。勉強もスポーツもできて、女に不自由したこともないお前には」

「何だよ、その言い方は。俺だっていろいろと苦労してるんだぜ。お前ならわかってくれてると思ってたのに」

「わかってるよ。俺だってお前にこんなことを言いたくはないさ。でも、もうどうしようもないんだ。俺の理絵への想いは永久に叶わないんだから」

それ以上、僕が雅也に告げるべきことは何もなかった。雅也はしばらくの間こちらを呆然とした表情で見っていたが、やがて力の抜け

た弱々しい声で呟いた。

「孝平、ごめんな。でも、俺にはどうすることもできないな」

雅也は、肩を落としてその場から立ち去っていった。僕は雅也に言い過ぎたことを後悔すると同時に、自分のことを本気で心配してくれていることがわかってすまないとも思ったが、一方で自分の想いをはつきりと伝えられたことで、胸のつかえが取れたような奇妙な爽快感に覆われていた。それは、自分の気持ちと行動が一体化した画期的な瞬間でもあった。だからもう、僕がなすべきことは何もなかった。後は周囲が考えればいいことだと思った。

でも、僕にとって針のむしろのような時間は終わらなかった。公然とあざ笑う者こそいなかったが、周囲のひそひそ話にさえ妙に敏感になってしまい、神経がささくれ立つような状況が続いた。僕はそのまま一直線に家に帰りたい衝動に駆られたが、やがて笑いたい奴には笑わせておけばいいと強引に割り切ることにして、何とか午前中の授業を切り抜けた。僕は単純に負けたくなかったのだ。ここで引き下がってしまったのは、自分が書いた小説自体すら否定されるような気がしたからだ。それだけはどうしても耐えられなかった。

それは昼休みのことだった。僕は居心地が悪かった教室からようやく開放されると、いつものように図書室で文章を書くことに専念した。もつとも、まともに書けるような精神状況ではなかったが、それでも僕は、禅の修業のように必死に心を落ち着かせようとしていたのだ。すると、僕のすぐ横に人の気配がしたかと思うと、程なく目の前に雑誌が差し出された。僕は、うんざりしながらも努めて冷静な口調で言い放った。

「そんなに人をからかって、一体何が面白いんだよ？」

そうして振り向きざまに見上げると、それは同じクラスの西村瑞紀だった。彼女はクラスの中でもひとときわ大人しく目立たない存在で、休み時間も他の女の子と騒ぐことなく、いつも自分の席で文庫本を広げて読んでいた。

「これ、いい話だったわ」

「実話だからな。そりゃあ、さぞかし面白いだろうよ」

この雑誌のことで、僕が話したいことは何もなかった。笑いたい奴らには笑わせておけばいいのだ。でも、瑞紀にまで笑われていることに愕然とした僕は、そのやり場のない怒りにただ慥然とするしかなかった。

「私は、いい話だって言ったのよ。面白いなんて思っていないわ。それに、これは小説なんですよ？ 偶然の一致で名前が重なったとしても、それは仕方がないんじゃない？」

瑞紀は僕の隣に座ると、持っていた文庫本を広げて読み始めた。顔の半分が覆われそうな黒いふちの眼鏡や流行遅れの三つ編みが、彼女の地味さをことさらに強調していた。どこをどう見ても、お世辞にも可愛いとは言い難かった。

「いつもここで小説を書いているのね」

「ああ、まあね」

「そして毎朝、駅のホームで杉下理絵を見ている」

「どうしてそのことを……一体何が言いたいんだよ？」

「私も毎朝見てるから、彼女のことを」

「えっ」

「私も好きなのよ、彼女のこと」

瑞紀のその一言を、僕はうまく理解することができなかった。彼女のあまりにさりげない言動が原因なのかもしれないが、それを差し引いても、女が女を好きになるということが何を意味するのか、そこに友情以外の何が存在するのかを考えると、僕の頭の中は確実に混乱していた。その意味で、僕は見事なまでに常識に支配されていたのかもしれない。

「女が女を好きなのって、やっぱり変なのかな？」

「どうかな？　そういうのって考えたこともないから」

「じゃあ考えてみてよ。小説を書いているのなら、それくらいの想像力が必要よ」

瑞紀はそう言った後で、口元を緩めてかすかに微笑んだ。それは笑顔というにはあまりに小さなものだったが、少なくとも僕には彼女が笑ったように感じられたのだ。

「まあ、男が男を好きになることもあるし、深い友情だと考えれば変でもないよな」

「そういうんじゃないのよ。もっと親密で、どうしよもなく惹き込まれていくような感覚なの」

「それって、恋愛感情そのもののような気がするけど」

「だから最初からそう言ってるじゃない」

もはや、僕の混乱はとめどないものになっていた。同性に対して恋愛感情を抱くという現実、僕の理解を遥かに越えるものだったからだ。僕は、自分が雅也に恋愛感情を抱く不自然さを根拠に、瑞紀に説明しようとしたが、彼女に一蹴されることを感じて黙っていた。

「とにかくそういうことだから。これからはお互いにライバルよ」

それを最後に瑞紀は席を立つと、文庫本を片手にゆっくりと図書室を出ていった。僕は彼女の後にライムの香りを感じながらも、不条理な人間関係の出現を否定しようとしていた。ベクトルの方向が明らかに間違っているのだ。でも一方で、それは確かに存在しているのだ。僕は思いもかけないライバルの出現に実感がわかず、部屋の天井を見上げてため息をつくしかなかった。

それが二人の何気ない始まりだった。僕が昼休みに図書室で小説を書いていると、その隣には必ずと言っていいほどに瑞紀の姿があった。僕らは、言葉こそあまり交わさなかったが、次第に互いを受け入れ、認め合うようになっていった。瑞紀が僕の書いた文章を批評することも度々あったが、自分の文章について誰かから意見を言われることなどなかった僕にとっては、それは少なからず新鮮で貴重な体験だった。でも一方で、僕らの関係がある一線を越えることは決してなかった。同一人物を好きになってしまった奇妙な偶然はあったにしても、僕らの心のベクトルは、その種類の違いもさることながら、お互いに全く別の方向を向いていたからだ。その意味で僕らは、性差のない対等な関係の上に成り立っていた。

一時はぎこちなかった雅也との関係も程なく元通りになった。十年近い二人の関係が、この程度の些細なことで簡単に崩れないことをお互いによく知っていたからだ。雅也のとりなしによって、僕がクラスの仲間から孤立することも避けられた。雑誌に載った小説についても、本格的な夏の到来に掻き消されるように、話題にすら上らないようになっていった。ただ、理絵は相変わらず僕に冷たかった。雅也が懸命にフォローしてくれてはいたが、それでもお互いにフランクな付き合いにはなれなかった。でも僕は、そのことを悲観してはいなかった。むしろ、理絵との距離を保つことで自分の想いを抑えることができたからだ。そう、僕はまだ理絵のことがどうしようもなく好きだった。それだけは動かしようのない事実だった。

それは、終業式を間近に控えた七月中旬の暑い日だった。試験休み中ではあったが、僕と雅也は、学校のグラウンドが一面に見渡せるベンチに並んで座っていた。図書室へ本を返しに来た僕が、帰り際に何気なくグラウンドを見渡した時に、部活の練習をしていた雅也の姿が目に入って呼び止めたからだだった。

「練習中に悪かったな」

「いや、ちょうど休みたかったんだ。声をかけてもらってよかったよ」

「でも、今日も暑いな」

僕がうんざりしながら放った言葉に、雅也は呆れたような表情でこちらを見ながら答えた。

「夏なんだから当たり前だろ？ 孝平も、いつも本ばかり読んでないで、たまにはスポーツで汗でも流したらどうだ？」

「それもいいかもな」

僕の気のない返事に諦めたようにため息をついた雅也は、グラウンドで汗を流している仲間のほうに目を向けた。夏の太陽は僕らを公平に焦がし続けていたが、体を動かしている分だけ彼らのほうが辛いのは明らかだった。僕は彼らに深く同情したが、だからと言って同じ立場に立つ気分には毛頭なれなかった。

「ところで孝平、最近瑞紀と仲がいらしいじゃないか。やっぱりお前には文学少女がよかったのかな？」

「彼女は違うよ」

「違うって、何がだよ？」

「雅也が思ってるような、そんな関係じゃないんだ。強いて言えば同じ目標に立ち向かう戦友みたいなものかな」

「まあ、細かいことはよくわからないけど、お前も頑張れよ」

「何だよその言い方は。本当にそういうんじゃないんだからな。俺

はまだ……」

「理絵のことが好きなんだな」

「そう簡単に気持ちは変えられないさ」

二人の間に微妙なずれが生じていた。それは空間的なものではなく、思想的な時間差だった。どこからか蝉の声が聞こえていた。

「わかった、俺が悪かった。もうこの話はやめよう。でも、本当に今日は暑いな」

僕の気持ちを察したのか、そうして無理矢理に話を切り上げた雅也は、再びグラウンドで汗を流す仲間たちのほうに目を向けた。その横顔を見ながら僕は、自分の心の中に依然として雅也に対する嫉妬心が残っていることに気づいて愕然とした。かすかに蝉が鳴き続ける中で、それは僕が自分の想いを再確認すると同時に、その現状から脱することを強く決意した瞬間でもあった。

やがて夏休みが始まったが、僕は理絵への想いを封じるために、今まで以上に小説の世界にのめり込んでいった。学校が休みの間は図書室が使えないので、その代わりに毎日のように市立図書館に通い、出版社の主催する新人賞に応募するための作品を書き続けた。僕はそのことで、懸命に自分の心のバランスを保とうとしていた。

それが現実からの逃避であることをわかっていながら。僕の隣には、三日に一日の割合で瑞紀が座っていた。彼女は、自分で持ち込んだ文庫本を読みながら、時々思い出したように僕の書いた文章に意見した。中には直感的で的外れなものもあったが、考えてみればそれは、自分以外の新しい女性的な観点からのもので、今までの僕の中で最も欠けていた部分だった。だから、僕は努めて彼女のアドバイスに耳を傾け、次々と自分の文章の中に新しい息吹を吹き込んでいった。

「ねえ、どうして私が理絵を好きなのかわかる？」

瑞紀が、自分のことでそこまで踏み込んだのはそれが初めてだった。彼女はいつも僕の文章については話す、それ以外のことを決して口に出さなかったからだ。建物の外には明らかな夕立の気配があり、低く垂れ込めた灰色の雲が今にも外界に雨粒を落とそうとしていた。それは、八月半ばには典型的な天気だった。

「私にないものを持っているからよ。明るくて社交的で、何事にも積極的で。理絵が夏の光り輝く太陽なら、私は冬の夜空に寂しく浮かぶ月ね」

「俺もそうだよ。理絵は、俺にないものをたくさん持ってるんだ。理絵だけじゃない、雅也もそうだ。俺なんか月にもなれない。名もない星のひとつに過ぎないんだ」

「河西くんは違うわよ。少なくともあなたには文才があるわ。それだけでもすごいことじゃない」

それが僕に対する励ましかどうかはわからなかったが、瑞紀はそう言った後で三つに編んだ黒髪を軽くいじった。彼女の着ていた青いポロシャツが、僕の目の奥に確実に染みこんできていた。

「前から一度聞こうと思ってたんだけど」

「何？」

「どうして女が好きなんだ？」

「やっぱり変かな？」

「現実的に見るとね」

「でも、小説ならありえるわよね」

「ここはまぎれもない、ノンフィクションの世界だよ」

「私にとってはフィクションなのよ」

瑞紀の眩きが、微妙な重みを持って僕の心に響いてきた。彼女にそう言うだけの裏付けが存在していることを察した僕は、続きを聞

こうかどうか迷ったが、自分の中にある飽くなき好奇心が次の疑問を言わせた。

「昔に何かあったのか？」

その問いかけに瑞紀が答えるまでに、かなりの時間的空白があった。僕は、軽い後悔と真実を知りたい欲求を併せ持ちながら、彼女からの答えを我慢強く待った。その間にかすかな喉の渴きを感じたが、それも程なく好奇心の波に呑み込まれていった。

「そんなに昔のことじゃないの。二年前のことなんだけど……あつその前に、私に二つ上の兄さんがいること話したっけ？」

「いや、聞いてないけど」

「まあいいわ。とにかく私には、二つ上の兄さんがいるんだけど、あれは私が中学二年の夏だったわ。時期的には今と同じ頃だったけど、夏休みの真只中で暑い一日だった。その日は一日中母親もいなくて、昼過ぎに本屋に行つて気に入った本を何冊か買つて、家で読もうと思つて帰つてくると、玄関に兄さんのスニーカーがあつたの。兄さん、高校で野球部だったから、夏休みの練習で今日も帰りが遅いと思つてたから、ちょっと不思議だつたんだけど、あまり気にしないで二階にある自分の部屋に向かつたの。そしたら隣にある兄さんの部屋の戸が少し開いていて、中から変な声が聞こえたの。兄さんの声には間違ひなかつたんだけど、何か変だなと思つて戸の隙間から中を覗いたの」

そこまでを言うと、瑞紀は軽くため息をついた。僕はいくつかの可能性を予期しながらも、彼女から放たれる次の言葉を待った。

「兄さん、下半身に私の下着を巻きつけて……」

「わかつたよ。もう言わなくていいから」

「私、兄さんが好きだったの。強くて優しく、小さい時には随分助けてもらった。でも、そんな兄さんがあんなことをしてるなんて」

僕の静止を振り切つて続けた瑞紀は、でもそこで完全に言葉に詰まつてしまった。雨は既に降り始めていて、雨粒が建物を叩く音が

かすかに聞こえてきていた。

「何て言っていていいかわからないけど、それって男だったら誰でも経験してることだよ。もちろん、大好きでいつも身近にいる兄さんがそんなことをしてたのはシヨックだったろうけど」

「わかつてるの。頭ではわかつてるんだけど、現実には血の繋がった兄さんのそんな姿を見ちゃうと、男の子がみんなあんなことをしてると思うと嫌なのよ。耐えられないの」

「わかるよ」

「わかるわけないわ。男のあなたに。一人っ子のあなたに」

「わかるさ。俺にも姉さんがいてそんなことをしてたら、女を嫌いになつてたかもしれない」

「もしもの話じゃないの。私は現実に見てしまったのよ」

「同じ立場で同じ経験をしなければ人の気持ちはわからないのか？ だったら誰の気持ちもわからないさ。瑞紀の気持ちも永遠にわからないよ」

僕のその訴えには、さすがの瑞紀も返す言葉を失っているようだった。でも僕は次の瞬間、言い過ぎてしまったことを早くも後悔し始めていた。一般論を並べたてても、何の解決にもならないことに気づいたからだ。

「ごめん、言い過ぎた。確かに同じ立場に立たないとなかなかわかり辛いよな。でも、少なくとも俺は、瑞紀の気持ちをわかってると、これでも努力してるんだぜ」

「わかつてる。ごめんね。こんなことを話した私がいけなかったわね」

「でも瑞紀の話が聞いてよかったよ。いつも瑞紀の意見が聞いて、それはそれで感謝してただけど、瑞紀自身の話はほとんどしてくれなかったから」

「別に話したくないわけじゃなかったの。本当を言うとも話したかったの。でも、私の話は多分つまらないし、河西くんも毎日一生懸命書いてるからなかなか言い辛くて」

「これからは、今日みたいにもっといろいろな話をしようよ。どんなに些細でつまらないことでも、お互いに話をするから分かり合えると思うんだ」

「そうね、今度からそうするわ」

「今からにしようよ」

僕の提案に、瑞紀もその顔全体で笑顔を見せて頷いた。今の彼女の表情は、誰が見ても明らかかな笑顔だった。そして僕は、瑞紀との心の距離が一気に縮まったような気がして嬉しかった。瑞紀の存在を意識したという意味では、この時が最初だったのかもしれないかった。

それからの僕らは、以前にも増して親密になっていった。二人の間の会話は次第に多くなり、不思議なことに、それに比例して僕の文章を書くペースも上がっていった。瑞紀が笑うことも多くなり、その表情は豊かさや深みを増していった。二人の関係はそうして新たな段階に入り、お互いの感情に相乗効果をもたらしながら広がっていった。僕の中での瑞紀の存在は日増しに大きくなり、図書館に行く目的が文章を書くためなのか、それとも彼女に会うためなのか、自分でもよくわからなくなっていた。

それは、夏休みも終わりにさしかかったある夜だった。その日の僕は、珍しく図書館に行かずに家で文章を書いていた。そこに電話のベルが聞こえ、五回目のコールで受話器を取ると、その向こうからは幾分沈みがちな雅也の声が聞こえた。

「なあ孝平、話したいことがあるんだけどこれから会えないか？」

「ああ、いいけど、何かあったのか？」

「まあ、後でな。公園で待ってるから」

電話は居心地悪く切れた。僕は切り際の雅也の声に只ならぬ予感を感じて、スウェット姿のまま取りあえず待ち合わせ場所に急いだ。

夜の公園には当然のように子供たちの姿はなく、小さな住宅街の真ん中にひっそりと佇んでいた。僕らの他には人影もなく、そのことが僕の気持ちを幾分重くさせた。

「夜になっても本当に暑いな」

「なあ雅也、話したいことって何だよ？」

「孝平、瑞紀とはうまくいってるのか？」

「話をそらすなよ。言いたいことがあるなら早く言えよ」

「そうだな、男らしくないよな。実は俺、理絵と別れたんだ」

「えっ」

雅也の意外な告白に、僕はそれ以上の言葉を発することができなかった。いや正確に言うと、うつすらと予想してはいたのだが、それでも現実に雅也の口から出された一言は、僕を驚かせるのに十分なものだった。

「まあ、そういうことだから」

「どうしてだよ？ だって、あんなに仲がよかったじゃないか」

「確かに、最初の頃はうまくいってたんだけどな。ある時から、ボタンの掛け違いみたいに少しずつお互いの気持ちがずれちゃって、

気がついたらもうどうしようもなくなってたんだ」

「それじゃ答えになってないだろ。お前たちはそんな簡単な関係だったのか？」

「簡単じゃないさ。これでも俺、随分悩んだんだぜ。このまま別れてもいいのかつて。本当に後悔しないのかつて。でも正直言つと、途中からは結構辛かったんだ。理絵も同じだったと思う。だからこれでもよかったんだよ。後悔もしないさ。いや、するかもな。でも少なくとも、付き合わなかつたらわからなかったこともたくさんあったし、これはこれで決して無駄にならないさ」

雅也にそこまで言われると、僕もそれ以上責めることはできなかった。もちろん、その資格もなかった。どこからか、子供の泣き声が聞こえてきた。

「そうか。まあ二人で決めたことだから、俺がどうこう言っても仕方ないけど、でも残念だな。二人は結構似合ってたんだけどな」

「本当にそう思ってるのか？」

「えっ？」

「本当はお前、心の底では喜んでるんじゃないか？ 次は俺の出番だって」

雅也の一言は、僕の核心を見事に突いていた。全面的ではないにしても、僕の心の中には明らかに理絵への想いが残っていると同時に、雅也に対する羨望と嫉妬の念があったからだ。でも、仮にわかりきっていてもそれを口にするにはできなかつた。少なくともそれが、僕の雅也に対する礼儀だと思っていたからだ。

「そんなわけないだろ？ 大体雅也と別れたからって、あの子が俺を好きになるはずがないだろ？ 最初から可能性なんかなかったんだよ」

「そんなこと、聞いてみなきゃわからないだろ？」

「雑誌に載った俺の小説を読んだ時のあの子の表情、お前も見ただろ？ とんでもないって顔。あれが答えだよ」

「でも、俺は可能性のないことなんかないと思うけどな」

明らかに不満そうな雅也は、僕の言葉を否定するように足元に転がっていた小石を軽く蹴った。雅也に言われるまでもなく、僕にはわかっていた。少なくとも、頭の中ではそう思っていた。でも僕には、その可能性を信じて行動に移す力も勇気もなかった。何故ならば、自分でも嫌になるほどに内気で臆病な人間だったからだ。

二人が別れた事実が、僕と瑞紀の間に微妙な影を落とすことを恐れた僕は、瑞紀に話すことを意図的に避けた。僕は、瑞紀に理絵のことなど考えてほしくなかったのだ。僕の文章だけを、僕のことだけを考えていてほしかったのだ。でも一方で僕は、二人が別れたことから理絵への想いを改めて感じることになり、叶わぬ夢と現実との狭間で頭を悩ませ続けた。そして僕の意図とは無関係に、周囲の状況は夏の終わりとともに急激な変化を見せることになった。

「よしっ、これで完成だ」

「お疲れさま。よく頑張ったわね」

「これも瑞紀のおかげだよ」

二学期を目前に控えたその日の夕方、僕と瑞紀は市立図書館で小説の完成を喜び合っていた。

「私は何もしてないわ」

「でも、瑞紀がいてくれたからこの小説が書けたんだ。本当に感謝してるよ」

「そう？　じゃあ、そのお礼に何かしてもらおうかな？」

「ああ、何でも言ってくれよ」

「明日海を見に行かない？　私、海が大好きなの。ほら、明日で夏休みも終わりでしょ？　小説も書き終わったことだし、最後の日くらい気晴らしに行きましょうよ」

「そうだな、それもいいかもな」

「あつ、でも言っておくけど、海を見るだけだからね。私、泳げないから」

「俺だつてそうだよ。それに、この時期じゃクラゲが一杯で泳げないよ」

僕らはそうして錘が取れたような開放感に浸りながらお互いに笑い合つと、夏休み最後の日にいい思い出が作られることを祈った。

建物の外は茜色の世界に覆われていたが、僕の心の中は青く透き通るような爽快感に満ちていた。

翌朝は青空こそなかったが、広がっていた雲は薄く、所々から太陽の光が差し込んでいた。僕と瑞紀は、午前十時に駅で待ち合わせると、買い物客で混雑する電車に乗り込んで海に向かった。僕の住む町から海までは、何本かの電車を乗り継いで二時間以上かかった

が、季節外れの海に急ぐ理由もなく、人影もまばらな砂浜に着いた時には、図書館で小説を書いていたことが遠い昔の出来事のように感じられた。

「あんまり天気がよくないな」

「いいじゃない。別に泳ぐわけじゃないんだし」

僕らはその時、波打ち際から少し離れた砂浜に座り、目の前から彼方に広がる海を見ていた。そこに青さは感じられなかったが、規則的に優しく耳を打つ波の音や、時折流れ来る風の声はまぎれもなく海のものだった。確かに天気はよくなかったが、その突き抜けるような爽快感と開放感は、僕らが非日常的な世界に身を置いていることの端的な証明になっていた。

「瑞紀が今日着ている服、とてもよく似合ってるよ」

「そう？ 普段着ている服とあまり変わらないと思うけど」

「それにその髪。三つ編みよりそのほうが断然いいと思うけどな」

僕の言葉を気に入ってくれたのかどうかはわからなかったが、瑞紀はうつむき加減にはにんだ笑顔を見せた。薄いブルーのタイトなTシャツに、少し色褪せたデニム地のショートスカート姿の彼女は、僕が言うまでもなく明らかに普段とは違っていた。そして、シヤツで強調された小ぶりな胸が、僕を否応なく切なくもやるせない世界へ誘った。

「でも、たまにはこうやっていつもとは違う場所に身を置くのもいいかもな。何かこう、別世界に来たみたいな感じですか」

「やつぱり、来てよかったですよ？ ねえ、せつかくだから、ちょっと海に入っていかない？」

瑞紀はそう僕を誘うと、籐で編まれたサンダルを脱いで裸足のまま駆け出していった。僕はそんな彼女の後ろ姿を見ながら、改めて今日ここにいる幸せを感じ、そして瑞紀への意識が揺れる想いに変わる瞬間を感じ始めていた。

僕らはそうして、ひとしきり波打ち際で海と戯れた後、近くの高台に緩やかなうねりとともに広がる公園の舗道をゆっくりと歩いて

過ごした。瑞紀は以前にもこの場所に来たことがあるらしく、僕の隣で思い出交じりに周囲の景色をいろいろと説明してくれた。風に泳いだ彼女の髪が僕の頬を優しく撫で、そこからほのかに発せられたライムの香りが鼻をくすぐった。三つ編みを解いてストレートに落とした長い黒髪が普段とは明らかに違って、それが僕を別の女の子と一緒にいるような奇妙な錯覚に陥らせた。

でも、そんな柑橘系的な想いとは裏腹に、天気のはうは僕らを待たせてくれなかった。いつの間にか空には黒味がかつた雲が分厚く立ち込め、程なくそこから産み落とされた大きな雨粒が僕らを激しく襲いだした。僕はとっさに瑞紀の手を取ると、全速力で走りながら雨宿りのできる場所を探したが、ようやく畳みかけの海の家から張り出す庇の下を見つけて潜り込んだ時には、水分をたっぷり吸い込んだ服が、僕らの体にまとわりついて離れなかった。

「濡れちゃったな」

「そうね、急だったからね」

そう言っつて、ハンカチで体についた雨の水を落としていた瑞紀のシャツは、その体にびったりと張り付いていて、胸のあたりにはつきりと見えた下着の存在に、僕は目のやり場に困っつうつむいた。

「なあ、どうして海が好きなんだ？」

「えっ？」

「あつ、ごめん。急に変なこと聞いちゃって。ほら、昨日話してたでしょ？ だから、どうしてなのかなと思ってさ」

「実は私、小学生の時までここで暮らしてたの」

「そうだったんだ。それでこの辺のことをよく知ってたんだ」

「私の家、この近くで食堂をやってたの。夏には、こんな風に海の家も出して……今思えば、私にとってあの頃が一番よかったのかも」

瑞紀は遠い目をしながら、雨に煙って境界線の曖昧になった空と海の彼方を見ていた。周囲には僕らの他に人影もなく、灰色一色の世界で彼女のシャツの青さだけが僕の目を捉えて離さなかった。

「でもね、私が小学六年生の時にお父さんが死んじゃって、食堂も手放さなきゃならなくなっつて……それで今の場所に引つ越してきたの」

「大変だったな」

「でも、それから何もかもがうまくいかなくなって。もちろん、引越したせいばかりじゃないとは思っけど」

「きつと、風向きが変わる時もあるよ」

「本当にそう思う？」

「思うさ。でも、風向きはただ黙っていても変わるものじゃない。自分の手で変えるものなんだ。自分を信じて努力していけば、きつと風向きは変わる。いや、変えなきゃいけないんだ」

そう瑞紀を励ましたもの、僕は自分の偽善さに対して本当にうんざりしていた。言葉だけなら、いくらでも綺麗事は言えるのだ。僕は、自分の放つ言葉と実際の行動とのギャップに、体が空中分解をしていくような絶望的な隔絶感に苛まれた。

「河西くんて、案外前向きだったのね」

「言葉だけなんだよ」

「えっ」

「口先だけのはったりなんだよ。本当は俺、臆病で弱気などうしようもない男なんだ。自分を信じることもできずに、努力もしないでただ風向きが変わるのを待ってるだけで……情けないよ」

「理絵のことを言ってるの？」

「そのことだけじゃないんだ。俺という人間そのものの問題なんだよ。俺、つくづく自分が嫌になったよ」

そんなことを瑞紀に話す無意味さはよくわかっていたが、でも僕は彼女に伝えたかったのだ。自分という人間の本质を知ってもらいたかったのだ。

「私、そんな河西くん、いいと思ったのよ」

「えっ？」

「河西くん、私とよく似てるの。臆病で弱気なところも、無口で孤独が好きなところも、自分が信じられずに、ただ風向きが変わる時を待っている受け身なところも。だから、そんな風に言わないでほしいの。聞いていると、自分自身が否定されてるような気がするか

ら

「わかったよ。もう言わないよ。俺たち、お互いを映す鏡のような存在なのかもな」

二人にそれ以上の言葉は不要だった。と、少なくとも僕はそう感じていた。だから僕はこちらをじっと見つめる瑞紀の、雨に濡れた青紫色の唇に潤いを取り戻させるために、自分の唇を重ね合わせようとした。自分の想いのままに、その勢いのままに。

「ちょっと待って。何するの？」

その声は唐突に響いた。僕は夢から覚めたような気がして目を開き、瑞紀の顔を見つめたまま言葉を発することができなかった。

「私、そんなつもり全然ないのに」

「だって今、二人はよく似てるって」

「確かに言っただわ。でもそういう意味じゃなくて、もっと根源的なものよ」

「男と女以上に、根源的なものなんかあるのか？ それとも、俺たちは親友だとも言うのか？」

「河西くん、私のことを全然わかってないのね。大体私のことなんか好きじゃないんでしょ？ 今でも理絵のことが忘れられないんでしょ？」

瑞紀の問いかけは見事的に的を射ていた。彼女の言う通り、僕はまだ理絵のことが好きだった。片想いとはいえ、現実的でなくても、忘れることなんてできないのだ。僕はただ、より可能性があるという点だけで、瑞紀との仲を先に進めようとしているに過ぎなかったのだ。

「ごめん、私帰るね」

僕に答えがないことで判断したのか、瑞紀は意を決したような表情で、まだ止まない雨の中を歩き出した。僕は、彼女と別れたくない一心から何とか引き止めようと、とっさに頭に浮かんだ言葉を深く考えもせずに口にしていった。

「理絵、雅也と別れたんだ」

その叫びに呼応するかのように瑞紀は立ち止まり、僕は雨の存在も忘れて彼女のもとに駆け寄った。

「ごめん。この間雅也から聞いたんだ。瑞紀の心が揺れ動くのが怖かったから、言えなかったんだ。瑞紀には、俺のことだけを考えて

いてほしかったから」

「自分はどうなのよ？」

「えっ？」

「あなただって、理絵のことばかり考えてるじゃない。どうして私にだけ、そんな風に押し付けようとするの？」

瑞紀の言う通りだった。僕は自分の気持ちを大事にしたいばかりに、彼女の想いなど全く考えていなかったのだ。瑞紀との間に自分にとって都合のいい関係を築こうとしていたに過ぎなかったのだ。僕はもう、それ以上彼女を引き止めることはできなかった。叩きつけるような雨を浴びながら、次第に小さくなっていく後ろ姿を、ただ黙って見守るしかなかった。

翌日から二学期が始まったが、元来の内気な性格が災いして、僕は教室で瑞紀に話しかけることができなかった。昼休みになっても瑞紀が以前ののように図書室に顔を出すことはなかった。僕はこの状況を何とかしようと懸命に考えたが、気ばかりが先に立って焦るばかりで、結局のところ彼女に声をかけることすらできなかった。僕は卑怯にも、何事もなかったかのように瑞紀が図書室に現れる偶然さえ願ったが、自分の力で風向きを変えることもできない人間に、神様がそんな幸運をもたらしてくれるはずもなかった。僕にはもう自分が嫌になる気力もなかった。

「それで、お前の気持ちはどうなんだよ。瑞紀のこと、好きなんだろ？」

僕が、どうにも居たたまれなくなって雅也に相談を持ちかけたのは、九月も半ばになった残暑の厳しい日だった。その夕方、僕らは学校帰りに近くのファーストフード店に立ち寄ってコーラを飲んでみた。二階の席からはいつもと同じように通りを行き交う人々が見渡せたが、皆一様にうんざりした表情を浮かべながら、夜が近いにもかかわらず一向に弱まらない太陽の光を無防備に浴びていた。そんな時、雅也は僕の気持ちを確かめるように尋ねると、飲み終わっ

た後の氷を口の中に放り込んだ。

「わからないんだ、女として好きなのかどうか。ただ一つ言えることは、瑞紀を必要としているってことなんだ」

「だから、それが好きっていうことじゃないのか？」

「そうかもしれない。でも、やっぱり違うんだ。もつと根源的なものなんだ。俺が好きなのは……まだ理絵なんだ」

僕の訴えに、雅也はしばらくの間黙り込んだ。あるいはその内容を理解しようとしているのかもしれないが、いずれにしても僕は、雅也からの次の言葉を辛抱強く待つしかなかった。

「難しいことはよくわからないんだけどさ、もしもお前が、本当に瑞紀のことを必要としているのなら、このままじゃまずいんじゃないか？ 瑞紀ときちんと話したほうがいいぜ」

「わかってるよ。でも……」

「いや、お前はわかってない。俺、理絵と別れてみてやっとわかったんだ。自分の気持ちに正直になることが、どれほど大切かってことが」

雅也の言葉は現実には裏打ちされた重みを持って僕の胸に響いた。

自分の気持ちを相手に伝えることの重要性を、その時ほど痛切に感じたことはなかった。

「とにかく、後悔だけはするなよ。男なら、相手に全力でぶつかっていくくらいの気力がなきゃ駄目だからな」

こちらに向かって白い歯を見せながら笑顔で励ます雅也を見て、僕は改めて正面から瑞紀と話をしようと固く心に誓った。ありのままの自分の気持ちを彼女に伝えることで、僕はこれから先の二人の関係を公正に築き上げようとしていたのだ。

でも、僕のそのささやかな決意が実行に移されることはついになかった。雅也と別れて家に帰った僕は、母親から一通の青い手紙を受け取った。その潔いまでの青さに一瞬目を奪われた僕は、でも差出人を確かめるために封筒を裏返した。そこには、見覚えのある名前が神経質そうな字体で書かれていた。僕はその場ですぐに読みたい衝動を懸命に抑えると、一直線に自分の部屋へと向かい、机の前に座ってその封を開けた。手紙は瑞紀からのものだった。僕は、彼女に声すらかけられなかった自分も省みずに、その心の声を聞いた。い一心で手紙に綴られた文字の群れを懸命に目で追った。

河西くんへ

突然の手紙に、さぞかし驚いていることでしょう。本当は、面と向かって言わなければいけないんだけど、あんなことがあって、私もそうだけど、河西くんも私と話し辛そうだったから、こうして手紙を書くことにしました。

河西くん、この間海に行った時に言ったわよね。自分は臆病で弱気な男だって。ただ風向きが変わるのを待っているだけの自分が情けないって。私、それを聞いてとても嬉しかったの。自分以外にも同じ悩みを持っている人がいることがわかって、とても共感できたの。だから、あんな風に誤解させるようなことをしちゃって……本当にごめんなさい。でも、これだけは信じてください。私は河西くんと出会えて、改めて自分と向き合うことができました。誰かこうして心を重ね合わせた付き合いをしたことなんて、今まで一度もなかったから。その意味では、河西くんは私を映す鏡のような存在だったのかもしれない。ただ、どうしても男の人としては見られないの。河西くんとは、もっと根源的な部分で繋がっていたかったの。でも結局のところ、それは私の事情ですね。結果的にそれはう

まくいかなかったのだから。

突然だけど私、家の都合で引越すことになりました。本当に急なんだけど……だからクラスみんなへの挨拶もできません。でも前向きに考えるようにします。河西くんが言ったように、自分の力で風向きを変えられるように頑張ります。こんな別れ方になってしまつて寂しいけど、似たもの同士の私たちだから、いつか必ず会えると信じています。だからさよならは言いません。ただ、私の正直な気持ちを伝えたかったです。では、また会えることを信じて。

涙がとめどなく溢れ出てきていた。こんな風に泣いたのは生まれ初めてだった。それほどまでに、瑞紀がいなくなってしまう事實は僕の胸を深く抉り、心に大きな風穴をもたらししていた。そう、僕は自分の気持ち揺れ動いてしまつた時から、瑞紀を女として見てしまつた瞬間から今まで、彼女を決定的に失う道筋を自分からつけてきたのだ。僕は自分の体の一部を失ってしまったような虚無感で手紙をもう一度読み直すことすらできなかった。次々に湧き出る後悔の念に苛まれ、瑞紀との出会いからもう一度やり直したい激しい欲望に駆られた。でも一方で、それを仕方のないことだと割り切る自分もいた。仮にもう一度やり直したとしても同じことをするだろうと思つていた。何故なら、それこそが僕自身だからだ。僕が僕である以上、こうなることは必然だったのだ。弁解をするつもりはなかったが、それがまぎれもない僕の正直な想いだった。

次の日、当然のことながら教室の中に瑞紀の姿はなかった。担任からその事実が伝えられた時のクラスのかすかなざわめきだけが、彼女が確かに存在していた最後の証明となった。窓の外から降り注ぐ太陽の光は、秋の到来を予感させるように優しく僕の机の上を照らしていた。

「瑞紀、本当にいなくなつちやつたんだな」

「ああ」

「孝平、お前後悔してるだろ？」

その昼休み、僕と雅也は校舎の屋上から果てしなく続く退屈な町並みと、一層にその高さを増した空を眺めていた。僕は、気遣いながらもそう尋ねてくる雅也に対して、秋の澄み渡った青空のような爽快感を友達にしながら答えた。

「それが俺だからな」

「えっ？」

「俺ってというのはそういう人間なんだよ。まあ仕方ないさ」

「何だか開き直ってるみたいだな」

「そうさ。自分の気持ちに正直に、思い切り開き直ってるのさ」

そう言い切った僕は、呆れ顔の雅也を横目に、懸命に瑞紀のいない世界に自分の居場所を見つけ出そうとしていた。彼女のいない状況に馴染もうとしていた。

でも、僕のその開き直りは決していい方向に進まなかった。僕は今までにも増して人生を惰性に頼るようになった。僕にとってのあのままは、自分の気持ちに正直になることと同時に、風向きが変わるのをただじっと待つだけの受け身の自分であることを意味していたのだ。瑞紀と別れた現実はそうして僕の心を、長い年月をかけて丹念に蝕んでいったのだ。

僕は瑞紀に無性に会いたくなつた。三年の歳月を経て、惰性を極めた果てに行き着いた先は何もない無限の荒野だつた。オアシスのない砂漠だつた。彼女と会つて、少なくとも高校一年生の頃の自分を取り戻したかつた。この手紙のように蒼かつた自分を。僕は、もう一度手紙の隅々まで目を通し、封筒の中までも確認して瑞紀の連絡先を探したが、電話番号どころか住所さえ書かれていなかった。手紙の消印すらばやけてよく読み取れなかつた。

僕は大きいため息をついて椅子から立ち上がると、目の前の窓を開け放ち、夏にしては乾いた風を部屋全体に送り込んだ。そんな風に部屋の窓を開けたのも久しぶりだつたが、そのことで僕はある重大な現実を再確認することになつた。そう、この部屋は僕の心そのものだつた。窓を締め切つて薄暗い部屋に閉じこもり、人との関わりどころか風さえ避けてきたのだ。僕は変わることを求められていた。瑞紀からも、そして何より自分自身からも……自分の手で風向きを変えなければならなかつた。その後でなければ、ひと足早く風向きを変えた瑞紀と会うことはできないのだ。

その日から僕は、遅まきながら受験勉強に身を入れ始めた。そして自分が変わったことを客観的に証明するために、今何をすべきかを真剣に考えた末、三年ぶりに小説を書くことを決意した。今の想いを文章の形にして、いち早く瑞紀の元に届けたかつた。だから僕は、改めて出版社の主催する新人賞に挑戦することにしたのだ。

でも、物事はそううまくはいかなかつた。受験勉強と執筆活動との両立は思った以上に厳しく、僕は寝る間も惜しんで頑張つたが、共倒れになることを恐れて程なく小説の執筆を諦めた。でも僕は、本当に諦めたわけではなかつた。机の引き出しの奥には少しセピア色に変色した原稿用紙の束があり、僕はおもむろにそれを取り出すと、ゆっくりと順を追って読み始めた。そう、それは三年前に僕が

瑞紀とともに書き上げた物語だった。あの夏に新人賞に応募しないまま時を経たこの作品こそが、自分の真実の想いそのものなのだ。だから僕は、もう一度読み返して手を入れたうえで、真新しい作品として応募しようと思ったのだ。

やがて年が改まったが、風向きのほうは全く変わらなかった。僕は二度目の大学受験にも失敗し、二浪するかどうかの結論も出せないままに、四月から家の近くのコンビニでバイトを始めた。結局のところ、自分の思惑とは裏腹に何もかもが変わらなかったのだ。僕の生活は再び惰性に委ねられるようになり、瑞紀と会えるチャンスも、そうして僕から確実に遠のいていくかに見えた。でも、そんな矢先に受け取った一本の電話が、僕に新しい運命の風を巻き起こした。それは応募していた出版社からのものであり、僕の作品が新人賞の佳作に選ばれたという連絡だった。佳作というところがいかにも自分らしいと思いつつも、久しぶりの朗報に、僕はほんの僅かながらでも、自分の力で風向きを変えられたような気がして胸が躍った。そして、この喜びを誰かと分かち合いたくなくなった僕は、一年ぶりに雅也のもとに電話をかけた。

「孝平、新人賞受賞おめでとう」

「新人賞じゃなくて佳作だよ」

「まあ、何だつていいじゃないか。とにかくよかった」

雅也は自分のことのように喜びながら、こちらに向かつてビールのジョッキを突き出した。それは、僕が出版社から入賞の連絡を受けた翌週の土曜日だった。その夜、僕は新宿にある居酒屋でビールを酌み交わしながら久しぶりの再会を喜び合った。雅也は高校を卒業後、サッカーの腕を買われて都心にある大学に進学していた。一年生の時から早くもレギュラーを確保し、二年生となった今ではプロからも注目される選手に成長していた。昔からのことではあったが、自分の力で風向きを変えていける雅也の姿に、僕は羨望と軽い嫉妬の念を抱いていた。

「でもこれで、孝平もようやく世間から認められたってことだな」

「何だか前にも、同じ言葉を聞いたような気がするけど」

「本になつたら絶対に買うからな。その時はちゃんと教えるよ」

僕の言葉を遮るようにそう念を押した雅也は、昔と同じ白い歯を見せながら微笑んだ。久しぶりに見る雅也は、背こそさほど変わらなかつたが、体格のほうはさらによくなり、その胸板は防弾チョッキを着ているかのように分厚かつた。

「俺のことはともかく、雅也のほうはどうなんだよ？ プロからも

注目されて順風満帆なんだろ？」

「まあそっこのほうはいいんだけど、あっちのほうかな」

「女のことか？」

「ああ。どうもこう、うまくいかないんだよな」

「また、お前のことだから選り好みしてるんじゃないか？」

「そうじゃないけど、理絵みたいな子がなかないなくてな」

雅也が理絵と別れた後、何人かの女の子と付き合っていたことは

知っていたが、結局はどの子ともうまくいかなかった。その原因が理絵の存在にあることは、他ならぬ雅也自身が知っているはずだったが、それでも高校三年間で理絵とよりを戻すことは決してなかった。そして僕は、理絵への想いを断ち切れないうちにその間を悶々と過ごしていたのだ。そんな僕の気持ちを探したのか、雅也は理絵のことを打ち消すように話題を変えた。

「ああ、そうだ。その後瑞紀からの連絡はないのか？」

「去年の夏に手紙が来たよ。結婚するって書いてあった」

「そうか」

雅也はそれだけを言うと、余計なことを尋ねてしまったことを後悔するようにうつむいて押し黙った。周囲の人々の話し声がやけに耳につき、それに耐えられなくなった僕は、今までの暗さを続けなためにあえて話をとりまとめた。

「まあ、昔のことはいいじゃないか。前を向いて歩いていこうぜ」

「そうだな。お互いに昔のことは忘れて、新しい出会いを見つけたいとな」

そう僕に呼応した雅也は、すっかり元の笑顔に戻っていた。僕らはその後、何回も乾杯を重ねながらいろいろな話で盛り上がったが、高校時代の話が出て、理絵や瑞紀の話に触れることだけは意図的に避けた。お互いの気まずさから逃れるためでもあったが、何より僕らは前を見て歩いていかなければならないと思ったからだ。過去を振り返るのは、少なくとも思い出がセピア色になってからでも遅くはないのだ。目の前で顔を赤くしていく雅也を見ながら、僕は二人の未来が明るく光り輝くものになることを信じていた。

その数カ月後、僕の書いた小説がついに書店の店頭に並ぶ日がやってきた。朝から落ち着かずにいた僕は、開店と同時に駅前の書店に入り、自分の名前が刻まれた本が何冊も積まれている現実を目の当たりにした。それでも僕はまだ実感がわかなかったが、自分が確実に風向きを変えていることだけは体感していた。

「もしもし、河西くん？」

その唐突な電話を受け取ったのは、その夜のことだった。僕は最初のうち、受話器の向こうから自分を呼ぶ声が瑞紀だとわからずにうまく反応できなかった。彼女に会うどころか、その声を聞くことすら、僕はとうの昔に諦めてしまっていたからだ。

「河西くん、ついに本を出したのね。『風向きを変えるとき』っていうタイトルで。私、書店で見かけてびっくりして、思わず買っちゃった。今、全部読み終わったところなんだけど」

「読んでくれたんだ。ありがとう」

「あの物語、四年前に書いていたものよね。私、今でもよく覚えてるわ」

瑞紀の声が、ようやく現実のものとなって僕の耳に響いてきた。彼女が受話器の向こうにいるのは確かだった。彼女は、現実に今存在しているのだ。

「ねえ、今度会えないかな？ 私たち、もう会ってもいいような気がするの。河西くんには、話したいことがたくさんあるの」

「わかったよ。実は俺も、瑞紀に会いたかったんだ。そして今、やっと会える状況になったんだ」

でもそれ以上、僕の言葉は続かなかった。瑞紀の声が、彼女に会えるという事実が、僕の声を完全に失わせていた。それは、失くしてしまった自分の一部を取り戻したような感慨だった。僕は、それほどまでに根源的に瑞紀を求めていた。太陽に光があるように、海に波があるように、二人の再会は必然的なことだったのだ。

「久しぶりに会ったんだから、もつとましなところでもよかったんじゃないか？」

「いいのよ、ここで。ここから私たちが始まったんだから」

その時、僕と瑞紀は市立図書館の窓際の席に向かい合って座っていた。夏も終わりを迎えようかという時期ではあったが、照りつける太陽はそれを拒むように町中に降り注いでいた。

「元気だったか？」

「ええ、まあね。ところで河西くん、今日が何の日かわかる？」

「さあ、何か特別な日だったかな？」

「八月三十日、『風向きを変えるとき』の完成記念日よ。四年前の今日、この物語が完成したんだから」

得意げにそう言うて風のような微笑みを見せた瑞紀は、この四年の間に確実に洗練されていた。茶色がかった髪には緩やかなウェーブがかかり、青いワンピースの上にはさりげなく白いカーディガンがのせられていた。彼女が今、一歩ずつ大人への階段を上っていることだけは明らかだった。

「そう言えばそうだな。あの時は、まさか入賞して本になるなんて夢にも思わなかったけど」

「『夢を現実に変えるとき』っていう感じがしらね？」

「そうか。そういうタイトルでもよかったよな」

「それじゃあ、私とそのタイトルで書こうかしら？」

そうしていたずらっぽいやつを投げかける瑞紀は、以前よりその表情に複雑さを増していた。それは、彼女が着実に人生経験を積んできた証に他ならなかった。

「そうだ、瑞紀結婚したんだよな？ 一年前に来た手紙を読んで驚いたよ。何て言ったってまだ十九歳だし、それに瑞紀の場合は男を……あつ、ごめん」

「いいのよ。自分でも驚いてるわ。でもね、これも河西くんのおかげなのよ。あなたに出会えたから、私も風向きを変えることができたの」

「それで、結婚生活はどうなんだ？」

「……別れたの」

「えっ」

瑞紀の一言を、僕はうまく理解することができなかった。時間の流れが巻き戻されたような奇妙な違和感の中で、僕はただ彼女から話の続きを待つしかなかった。

「今年の五月だったわ。結局一年ももたなかったけど」

「それはやっぱり、瑞紀のその、過去のトラウマが原因なのか？」

「それは関係ないわ。さっきも言ったけど、その意味では風向きを変えることができたのよ。それだけの人と巡り会えたと言ったほうが正しいかもしれないけど」

「じゃあ、どうして？」

「いろいろなことの積み重ねが原因ね。最初はほんの些細な行き違いだっただけけど、それが次第に大きくなっていった。ちょうどボタンを掛け違えたみたいに……気がついたらお互いが別の方向を向いていたわ。修復しようにも、もうどうにもならなかった」

僕は、かつて雅也が理絵と別れた時に言った言葉を思い出していた。でも、四年を経た今でも、ボタンの掛け違いが内包する真実を理解できずにいた。その意味で、僕はまだ明らかに子供だった。

「俺にはまだよくわからないな。本気で人を好きになったことがないからかもしれないけど」

「理絵のことは、あの時は本気で好きだったんでしょ？」

「わからない。あの時はそう頑なに信じていたけど、でも今となつてはそれも違うような気がする」

瑞紀は、隣の椅子に置かれたキヤメル色のトートバッグからハンカチを取り出して両手で軽く握り締めた。僕の言葉の意味を理解しているのかはわからなかったが、彼女の手に文庫本がない事実は、

僕をほのかに寂しい気分させた。

「俺はただ、憧れていただけなのかもしれない。自分ないものを数多く持っていて、その意味では自分と正反対な理絵のことを。俺自分のことが嫌いだったから」

「私もそうだった。自分が嫌いだった。だから理絵のことを好きになったんだと思う。河西くんの言うように、本当は憧れていただけなのかもしれない」

僕はその時ほど、瑞紀のことを身近に感じたことはなかった。自分の想いを分かち合える唯一の人物が、確かに今目の前に存在しているのだ。だから知ってほしかった。彼女に対する果てない想いを、思う存分に伝えたかった。

「でも、瑞紀とのことは違うんだ。俺たち心の底から分かり合えたいし、似たもの同士だったし、何て言うか……」

「根源的ところで繋がっていた」

「そうだよ、繋がっているんだ。俺たちは二人で一つなんだ。離れちゃいけないんだ。俺、この三年間でそのことがよくわかった。だから、これからも俺と一緒にいてほしい。俺と一緒に風向きを変えていってほしい」

僕の訴えを、瑞紀はただ黙って受けとめていた。その表情にかすかな躊躇いが感じられたが、僕は自分の想いが届くことを信じて疑わなかった。

「でも私、自信がないの。一度失敗してるし……あなたとうまくやれないかもしれない。それが怖い。あなただけは絶対に失いたくないの」

「それでもいいよ。ただ、そばにいてくれるだけでいいんだ。男だとか女だとか、結婚だとか、そういうことは自然な流れに任せればいいよ。大切なのは、今二人の心が重なり合っているという事実なんだ」

瑞紀は長い間何も言わなかった。ハンカチを強く握り締めながら伏目がちにテーブルの上を眺めていた。僕は、彼女からの言葉を辛

抱強く待つしかなかった。僕から言うべきことは、もうこれ以上なかったからだ。

「私なんかで、あなたの風向きが変えられるかしら？」

「二人で変えていけばいいんだよ。二人じゃなきゃ駄目なんだよ。

二人なら、きつと何もかもうまくいくから」

もう僕の言葉に迷いはなかった。僕は瑞紀を必要としていた。その存在をどうしようもなく求めていた。瑞紀は黙ったままゆっくりと首を縦に振ると、こちらに向かって初めて白い歯を見せた。それは、これまでに見たことのない彼女の微笑みだった。だから、僕も彼女に向かって最高の微笑みを提供した。風向きという名の二人の運命が変わっていくことを願いながら。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3650c/>

風向きを変えるとき

2009年3月24日10時09分発行